

## 〔 編集後記 〕

本号では、大塚亮太先生による臨床研究「急性胆嚢炎に対する早期手術の検討」に始まり、千葉医学会奨励賞を受賞された尾畑佑樹先生の「腸内細菌によるエピゲノム修飾を介した腸管免疫制御メカニズムの解明」、英語論文として小野嘉允先生の「PainVision apparatus is effective for assessing low back pain after fusion surgery」、さらには雑報として関根郁夫先生による「科学論文における英語の話」を掲載しています。原著、総説、そして雑報と並び、いずれも興味深いものばかりです。

現代の研究者にとって英語と扱う能力、それも日常会話ではなく論文を作成する能力は今までに増して強く求められるようになっており、関根先生の解説はそのためのよい道案内になると思います。雑誌の編集や査読をしていると、一般の学術誌に投稿されてくる論文の英語は、「素晴らしい！私もこういう英語をかきたい！」か「どうにもならない。二度と読みたくない」かの両極端のように思えます。残念ながら多くの場合、前者は専門家の手を経て修正されたものあるいはコピーペーストであるらしく、著者が書いただけのものはしばしば後者にはいるようです。困ったことに「どうにもならない」ほうの先生方の中にはなぜか自信満々、英語は得意だ、とされている方がしばしば混じっておられるようですが、これは日常会話の能力と論文を記述する能力とは全く次元が異なっている、あるいは異質なものであることを忘れていたためではないかと推測しています。試しに日本語会話の上手な外国人に文章を書いてもらうと分かりやすいかもしれません。私もだいぶ以前ですが、日常会話に全く事欠かず冗談も一緒に話していた「日本語の流暢な」外国人から、

「論文を書いたので見て欲しい」と渡された日本語論文を読んで、愕然とした記憶があります。そもそも会話は片言でも通じるものばかりです。もともと日本人同士の会話も文字起こしをしてみると間違いだらけですが、私達は会話の言語と正式な言葉とは違う、ということが無意識に使い分けられているのでしょう。

最近の英語学習意欲の高まりには驚くばかりですが、「英語をシャワーのように聞いていれば話せるようになる」という器具が流行したと思えば、一転して「シャワー英語は害悪」という意見（宣伝）などさまざまな話題が飛び交っているようです。つい先日は「そもそも日本語を知らないnativeに習っても日本人の英語はうまくならない。英語をしっかりと話せる優秀な日本語教師が一番」という広告を見かけ、結局紆余曲折して私の中学時代に戻ったのかという気がしました。学習方法はひとさまごまで、一律に論じることは出来ないと思いますが、会話と論文の能力は別、ということだけは、英語論文を書くという目的を設定する上で最初に理解しておく必要がありそうです。

日本人としてちょっと残念なことですが、英語が国際学術言語になっているのは事実です。であればまず英語を！と走り出したくなる気持ちはわかりますが、論文作成に必要なのはまずは論理を科学的に展開する能力です。関根先生がいみじくも冒頭で書かれているように、その点では日本語論文も英語論文も変わりがないことを、再確認したいと思います。それにしても、投稿する前にはかならず英文校閲をお願いしましょう。査読者に対しての最低限のマナーです。

（編集委員 亀井克彦）